

勲章とエネルギー

スタンダールにおける名誉

上杉 誠

ポール・ベニシューは『偉大な世紀のモラル』において、中世の騎士道と宮廷風恋愛が、ルネサンス期において古典古代を知ることで若返るさまを概略しつつ、コルネイユに至るまでの「貴族的理想主義 (idéalisme noble)」の変遷について語っている¹。「ユマニストの伝統²」に連なるともみなされ得る読書家であり、中世の騎士道と宮廷風恋愛、さらにはコルネイユの諸作品にも親しんでいたスタンダールを、その貴族的理想主義の後継者として位置付けることはあながち的外れではないように思われる³。大革命によって旧来の特権と義務が廃止され、市民の平等が一旦はそれに代わろうとする時代を生きながら、スタンダールは名誉の主題を作品中で繰り返し描いた。それでは、その名誉の主題はどのように展開されたのだろうか。

本論文は、スタンダールにおける名誉の主題に注目し、とりわけ典型的な名誉の姿が現れると作家がみなしている 16 世紀イタリアを舞台とする諸作品を扱う。もとより網羅的な研究ではないものの、名誉の主題に対する作家の執着の一端を明らかにしたい。まずは、ブルジョワ家庭生まれのスタンダールが名誉の主題を繰り返す理由を探るために、幼少期のスペイン主義の体験の検討から始めたい。

¹ Paul Bénichou, *Morales du grand siècle*, Gallimard, 1948 ; « Folio/essais », 1988, p. 19-20.

² Victor Del Litto, *La Vie intellectuelle de Stendhal*, PUF, 1962 ; rééd., Slatkine Reprints, 1997, p. 11.

³ スタンダールの作品と宮廷風恋愛の関係については次の論文がある。Sarga Moussa, « La tradition de l'amour courtois dans *De l'Amour* et dans *La Chartreuse de Parme* de Stendhal », *Romantisme*, n° 91, 1996, p. 53-65. また、スタンダールにおけるコルネイユの受容については次の論文を参照。Philippe Berthier, « Le Corneille de Stendhal », *Stendhal Club*, n° 116, 1987, p. 353-373.

1. 『アンリ・ブリュラルの生涯』におけるスペイン主義

『アンリ・ブリュラルの生涯』の中で、スタンダールは繰り返し「スペイン主義 (espagnolisme)」について語っている。それは感情の高ぶりを伴う現実離れした空想癖を指し、同時に、大祖母 (母方の祖父の姉) エリザベトとコルネイユの『ル・シッド』の思い出に起源をもつ名誉心と自尊心の称揚に結び付く。過度の空想は現実世界での滑稽な振る舞いをもたらすものの、その滑稽さは魂の偉大さの証明である。一方で、高揚した自尊心が自身の滑稽さを認め傷つくこともある。こうして空想癖と自尊心の両者は不可分となる。幼少から晩年に至るまでの自分のこのような性格の基礎を、スタンダールはスペイン主義と呼んでいた。

大祖母のエリザベトはスペイン風の魂の持ち主だった。その性格は名誉心の精髄であった。この感じ方が彼女から私にすっかり伝えられ、その結果、魂の精妙さと偉大さによる一連の滑稽な愚かな振る舞いの数々がうまれた。その愚かな振る舞いが私の中でいくらか終わったのはようやく 1810 年パリでのこと、プティ夫人に恋をしていた頃のことだ。とはいいいながら今でも、立派なフィオーリ [...] はこう言う。

「あなたは網を高く張り過ぎですね。」 (トゥキュディデス)

伯母のエリザベトは何かを大層称賛するときには、いまだに当たり前のようにこう言っていた。

「それはル・シッドのように美しい」と⁴。

1810 年、「プティ夫人」という変名によって表わされる恩人ピエール・ダリュの夫人アレクサンドリーヌに恋をしていた時期に一旦はそこから脱却したと思われたスペイン主義は、この自伝を書いている現在 (1835-1836) においてもまだ自身の内に認められる。「網を高く張る」とは、現実を顧みずに理想を高く求めるスタンダールの姿をその親友フィオーリが諷したものだろう。

それでは引用で語られるスペイン主義ゆえの「愚かな振る舞い」とは何を指すのだろうか。1810 年という日付とアレクサンドリーヌの名前に意味を見出そうとするならば、恋愛における失敗が考えられる。ドン・ジュアンのよ

⁴ Stendhal, *Œuvres intimes*, t. 2, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1982, p. 652. なお、「ル・シッドのように美しい」という文句は、ペリッソン (Paul Pellisson) の回想によると、初演時 (1637) の熱狂以来、決まり文句になっていたという。Cf. Corneille, *Le Cid*, Gallimard, « Folio/classique », 1993, « notice », p. 201.

うな「女の誘惑者になるという堅く決めた計画⁵」をもって 1799 年にパリに着いた少年は、パリの女性が「私の前で転ぶか、何かたいへんな危険に陥り、私がそこから彼女を助ける⁶」という夢に囚われ、誘惑などでできずにいた。パリに出てきて6年後の1806年には少しばかりこのような夢から治ったという記述⁷の先に、1810年アレクサンドリーヌへの恋を経験しながら漸く現実での恋愛の振る舞いを学びつつあった体験を読み取ることもできる。実際、1810年の日記でスタンダールは繰り返し「内気さ (bashfulness)」について語り、その感情を克服した喜びを記している⁸。夢に足を取られ恋愛の失敗という「愚かな振る舞い」を繰り返すのではなく、現実の具体的な振る舞いを身につけていく、それがスペイン主義からの脱却の一つであったのかもしれない。

もちろんスペイン主義は恋愛に限ったものではなく、直接に名誉に関わる記憶も作家に呼び起させる。『アンリ・ブリュラルの生涯』には、決闘の体験を振り返る箇所がある。発砲の記憶がないため恐らく決闘は中止されたのだが、そのことは後悔の種となる。

けれどもその [=決闘をした] 翌日から、この件を丸く収めてしまったことにひどく後悔を感じた。このことは私のスペイン風の夢の全てを傷つけていた。決闘をしなかった後で、どうして『ル・シッド』を称賛できようか？ アリオストの英雄たちにどうして心向けることができようか？ あの甘美なロランで立派な行いを繰り返し読んでいたローマ史の偉人たちを、どうして称賛したり非難したりできようか？

『ル・シッド』や『怒れるオランダ』、『ローマ史¹⁰』を読んで慣れ親しんでいたはずの名誉をかけた決闘の場面は自分自身によっては再現されることがない。書物を通して膨らませた空想と現実の落差に失望し、傷つくそ

⁵ *Ibid.*, p. 870.

⁶ *Ibid.*, p. 869. 同様の夢は繰り返し語られる。Cf. p. 877.

⁷ *Ibid.*, p. 869.

⁸ たとえば、1810年3月15日、3月20日の日記を参照。Stendhal, *Journal*, Gallimard, « Folio/classique », 2010, p. 601 et 603. また、アレクサンドリーヌへの恋については以下の研究書の次の箇所詳しい。松原雅典、『スタンダール 愛の祝祭』、みすず書房、1994、p. 50-105 (「アレクサンドリーヌ」)。

⁹ Stendhal, *Œuvres intimes*, t. 2, *op. cit.*, p. 828.

¹⁰ シャルル・ロラン (Charles Rollin) (1661-1741) による『ローマ史 (*Histoire romaine*)』のこと。『アンリ・ブリュラルの生涯』で複数回言及される (*Ibid.*, p. 634, 717 et 726)。禁じられながらの読書が多い中、この本は父も祖父も認めてくれた。

の姿は、『パルムの僧院』の一場面とも重なる¹¹。アリオストやタッソーの叙事詩で描かれる高貴な友情を想像してワーテルローの戦場に向かったファブリスは、一度は友人と思った仲間によって自分の馬を力づくで奪われ、「騎士道的で崇高な友情という美しい夢¹²」が打ち砕かれたことに熱い涙を流す。『赤と黒』でも、ブザンソンの街に着いたばかりのジュリアンは、スペイン主義ゆえに危うく決闘をしかける。「常に極端に至る〔ジュリアンの〕想像力は、決闘という考えでいっぱいになった¹³」ものの、決闘を始めるにはどのように振る舞えばよいのか分からない。自伝を書きながら想起するかつての自分のスペイン主義の滑稽さを、これらの例のように小説のなかで主人公に当てはめ、すでに晩年に入った作家は微笑むことができる。けれども、田舎から上京したばかりの16歳の少年にとって、理想と現実の懸隔は大問題であった。

パリの生活が始まるや否や、スペイン主義ゆえの苦しみと「愚かな振る舞い」が次々と明らかになる。

私を殺しかけていたのは精神的な束縛であった。

それは、グルノーブルでのように伯母のセラフィーに向けて抱いていた不正や憎しみといった感情ではなかった。

そのような不幸で済んでいればよかったものを！ それはもっと悪いもので、自分でしたいと思っていながらそこに辿りつけられないものごとを絶えず感じていたのだ¹⁴。

パリで少年を苦しめたのは、グルノーブルでのように家族から被る自由の剥奪ではなく（それならば圧迫を加える家族を悪者に仕立て上げ抵抗すればよかった）、夢想と現実の懸隔から自尊心が保たれなくなることであった¹⁵。

「網を高く張り過ぎる」結果、何も得ることができず、しかもその失敗の原因は自分にあるため一層苦しむのである。さらに、グルノーブルから出てき

¹¹ ベルティエは、現実の経験と理想の像との落差を「反結晶作用（*décrystallisation*）」と呼んでいる。想像力の働きによってつくられた結晶が、現実との違いを通して溶ける。Philippe Berthier, « Un grand homme de province à Paris », dans *Espaces stendhaliens*, PUF, 1997, p. 35.

¹² Stendhal, *Romans et nouvelles*, t. 2, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1952, p. 69.

¹³ Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. 1, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, p. 498.

¹⁴ Stendhal, *Œuvres intimes*, t. 2, *op. cit.*, p. 895-896.

¹⁵ スペイン主義が自分自身の欠点を認識する一方で、社会への批判には向かわないことについては、次の論文を参照。Madelaine Renedo, « Espagnolisme, folie de Stendhal », *Stendhal Club*, n° 67, 1975, p. 238.

たばかりの少年はパリで生活の流儀を知らない。薦められた馬車に乗らず泥のなかを歩き、サロンでは一言も話さない。

私は本能から黙っていた。誰も自分を理解してくれることはないと感じていた。ブラダマンテに対して感じていた私の優しい称賛を、一体どんな顔つきをして話せばよいのだろうか！ 偶然がもたらしたこの沈黙はもっとも効果的な政治であった。自分の威厳を少しばかりかでも保つ唯一の方法であったのだから¹⁶。

アリオストの『怒れるオルランド』の英雄への称賛を語り合う相手は見当たらない。決闘や英雄、名誉を描いた世界を共有する者は一人もいない。パリのサロンという新しい現実によって強いられた沈黙は、それが巧みな政治であったとして正当化される。正当化されなければ、スペイン主義の刻印を受けた少年の自尊心は許さないのである。

このように『アンリ・ブリュラーの生涯』では偉大と滑稽が同居したスペイン主義が幾度も描かれる。スペイン主義が問題となるのは、決闘などの名誉に関わる場合だけではなく、「感情が高ぶるとすぐに、私はスペイン主義に陥るのだ¹⁷」というように、未来への希望、恋愛への期待など様々な場面に關わる。感情の高揚だけではなく、高揚の後に訪れる失敗を冷静に観察する視線があることでスタンダールのスペイン主義は自らを騙すことから免れている。

幼いアンリが叔母（母の妹）のセラフィーと実父シェリュバンを憎む一方で、母方の祖父アンリ・ガニオンから知的薫陶を受けていたことはよく知られているが、大伯母エリザベトに対する愛着はある点においては祖父に対するそれを凌駕する。祖国愛を語りながらスタンダールは、父と祖父、伯父を祖国愛への共感を持たないものとして峻別し、エリザベトだけを自身の陣営に引き寄せる¹⁸。「優美で文学的な考え」の持ち主である祖父の性格は、祖国愛に燃え上がるスペイン主義の持ち主とはかみ合わない¹⁹。また、自伝の冒頭で数ある恋人の名前が列挙される中、ミラノでの思い人メチルドは「高

¹⁶ *Ibid.*, p. 901.

¹⁷ *Ibid.*, p. 835.

¹⁸ *Ibid.*, p. 601.

¹⁹ 祖父に対する感情的距離については次の箇所を参照。Philippe Berthier, *Stendhal et la sainte famille*, Genève, Droz, 1983, p. 86-88. また、祖父について語りながら「高貴な (élevé, noble)」とは正反対の「下劣な (bas)」に関する語が繰り返し用いられていることにも注意。Cf. Stendhal, *Œuvres intimes*, t. 2, op. cit., p. 601 et 654.

貴でスペイン的な感情²⁰」の持ち主とされる。大祖母から受けついたスペイン主義は、メチルドの思い出も加わり、スタンダールにとって限られたものだけが理解し共有する秘密のサークルをつくる。

2. 『カストロの尼』における二つの名誉

前節では『アンリ・ブリュエールの生涯』を通して、幼少期から育まれたスタンダールにおけるスペイン主義を概観した。読書の体験と大祖母の性格によって育まれたスペイン主義において、名誉は至高の価値とみなされたものの、その名誉を自分の中に感じることは決して容易ではなかった。本節では『カストロの尼』（1839）を取り上げ、イタリアを舞台にした作品において名誉の主題が二系列あることを明らかにしたい。スペイン主義とイタリアを並べると一見齟齬をきたすようにみえるものの、両者はその地理的境界のように必ずしも厳密に区別されるものではなく、区別される必要もない²¹。大祖母エリザベトのスペイン主義を通してその価値を身体に刷り込まれた名誉が、イタリアを舞台にした作品でどのように色付けられるのかを検討したい。

スタンダールの作品に頻出する論理に、政治体制や気候がその時代の風俗や芸術を決定するというものがある。『カストロの尼』においても、作品の舞台とされる16世紀イタリアの政治状況が作品冒頭で示される。

考慮していただきたいのは、これら専制君主はみな、自分が彼らに憎まれていると知っている共和主義者のそれぞれを個人的に知っていたということと[...]、これら専制君主の多くは暗殺によって死んだということである。そうすれば、16世紀のイタリア人にあれほどの勇氣と知性を与え、その時代の芸術家にあれほどの天分を与えた深い憎しみ、すなわち永遠の不信を御理解いただけるだろう²²。

16世紀イタリアは、かつての共和国を滅ぼした専制君主と、それに抵抗する共和主義者の勢力としての「盗賊（brigand）」との対立によって特徴づけられる。両者の対立に生じた「憎しみ」と「不信」がいわゆるイタリア・ルネサンスの芸術の開花の原動力となったというのだ。さらに上の引用に続く

²⁰ *Ibid.*, p. 545.

²¹ Madeleine Renedo, *art. cit.*, p. 236-237.

²² Stendhal, *Chroniques italiennes*, GF-Flammarion, 1977, p. 63.

箇所、語り手は、そのような社会の対立と実力行使の空気は、名誉に反するものだとする。

これら深い情熱が、名誉と呼ばれていたあのかなり滑稽な先入見が生まれるのを妨げていたさまをご覧いただけるだろう。その名誉とは、セヴィニエ夫人の時代のもので、とりわけ、生まれながら仕えている主人のために、それからご婦人方に喜ばれるために命を犠牲にすることであった。[...] こうして、ギャラントリーの精神が生まれ、恋愛さえもふくむあらゆる情熱が徐々に消え去ることとなったが、それも、われわれがいま現在みな従っているあの残酷な専制君主である虚栄心が栄えるためであった。王は虚栄心を保護したが、それも立派な理由があつてのことだ。こうして勲章の支配が生まれた²³。

ギャラントリーの精神が生まれ、あらゆる情熱が消え去る、とされるのはフランスの事情であり、「われわれ (nous)」とは、この作品が書かれた 1830 年代のフランス人のことを指すだろう。数世紀にわたる情熱の衰微と虚栄心の支配する現代、というこの引用に描かれる歴史認識はスタンダールのほとんどの作品に共通のテーマであろうし、イタリアを語るに当たり、参照項としてフランスの例を挙げるのはスタンダールには馴染み深い論理である。

この引用において 16 世紀イタリアはフランス風の名誉の不在によって特徴づけられ、この名誉はさらにギャラントリーに結び付けられている。ギャラントリーとは、「生まれながらの王」や「ご婦人方」といった自己以外の人物に自己の価値の審判を任せることを指している。フランチェスコ・チェンチと並んでドン・ジュアンの性格をもつ典型とされるジル・ド・レを論じる箇所が『ある旅行者の手記』（1838）にはあるが、そこには、「女性を自分自身の価値の審判者とみなすという突飛な考えをもった騎士道²⁴」という句がみられる。自己の価値を自身では判断せず他者の審判にゆだねる点で、騎士道も、ギャラントリーも名誉も同種である。

さらに、君主と名誉との関係を『カストロの尼』からの引用によって確認したい。

アカデミーの旧態依然たる文学者たちによって今でもなお賞賛されているたかさんの歴史家たちは、1550 年ごろにこれほど偉大な性格をつくりだしたこの有り様を隠すことに努めてきた。その時代、歴史家たちの慎重な嘘は、フィレン

²³ *Ibid.*, p. 63-64. 強調原文。

²⁴ Stendhal, *Voyages en France*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1992, p. 260.

ツェのメディチ家 […] などが自由にできたあらゆる名誉ある栄典によって報いられた²⁵。

語り手によれば、16世紀イタリアの真の姿は19世紀にまで伝えられていない。恋愛や憎しみなどあらゆる情熱がみられたその姿が現代に知られていないのも、歴史家が君主の御用学者になり下がり君主に都合のよい歴史ばかりを描いてきたためというわけだ。歴史家は嘘の代償として「さまざまな名誉ある栄典 (honours)」を得た。別の個所で「買収された (payé)」という言い回しが用いられるように、歴史家を得た名誉ある栄典とは買収による報酬に他ならない。君主に都合のよい歴史を書き名誉を得るといふ振る舞いは、前の引用での君主に従い勲章という名誉を得る、という振る舞いと同種である。『カストロの尼』冒頭で、16世紀イタリアでは不在であると語り手が宣言した「名誉」とは、以上のように、自己の価値を他者によって判断されるに任せた臣下に対して、君主がその代わりに与える報酬を指す。

しかし、名誉は不在であるという小説冒頭の宣言にも関わらず、実際に物語内容に入ると、名誉という語が繰り返し用いられていることに気付かざるを得ない。貴族の娘エレヌが、盗賊の首領の子といえども貧しいジュールと恋に落ちることはエレヌの父にとって名誉の問題となることは繰り返し言及される²⁶。同時に、ジュールがエレヌの父親から侮辱の言葉を投げつけられることによって、ジュールにとっても名誉の問題が生じる。恋人の父親を殺したのか、それとも生かしておこうか、決心がつかないジュールは、自分の父親の死後その代わりを務めてきたラニュースに相談するが、その助言は簡潔なものである。「皆の前で侮辱されたのだ。そもそも、名誉を汚した男は女にも軽蔑されるものだ²⁷」。公の侮辱によって傷つけられた名誉を回復するためには恋人の父親であっても殺さなくてはならない、というこの論理は、コルネイユ『ル・シッド』における主人公ロドリグの父親役ドン・ディエグを想起させる。ドン・ディエグは、恋人シメヌの父親を殺し名誉を守ったロドリグに対して、恋に対する名誉の優先を強調しているからだ²⁸。けれど、『ル・シッド』とは異なり『カストロの尼』のジュールは恋人の父親を殺害しない（その代わり兄の殺害は果たされるが、それは戦場

²⁵ Stendhal, *Chroniques italiennes*, op. cit., p. 65-66.

²⁶ *Ibid.*, p. 79, 88.

²⁷ *Ibid.*, p. 83

²⁸ 「名誉は一つしかないが、恋人などいくらでもいる！ 愛は喜びにすぎないが、名誉は義務なのだ。」Cornelle, op. cit., p. 109.

の偶然に帰せられるため、ジュールが自らの意志で名誉の義務を果たしたことはない)。『ル・シッド』のロドリグが、名誉を守ることができない男はあなたに愛されるにふさわしくない、と恋人に語り、一見対立する恋と名誉を両立させる論理を持ち込む(三幕四場)のに対し、ジュールは恋のために表向きは名誉の義務を捨てる決断をする。

ぼくは恨みを晴らすこともできたし、そうすべきだった。名誉がそう命じていたのだから。そうしなかったのは、ぼくの仕返しが、愛する人の目に涙を流させてしまうことを考えたからなのです。とても貧しくても同時に高貴な感情を持つことができるということを、もし不幸なことにもあなたがまだお信じにならないのなら、このことから納得していただけるでしょう²⁹。

名誉の価値よりも恋人の涙を見ることの辛さをジュールは優先させる。けれども、「父」代わりのラニュースが求めるのと同様に、名誉が命ずる声をジュールは確かに聞いている。これをジュールは「高貴な感情 (sentiments nobles)」と呼ぶが、ここでの高貴さとは、名誉の声を聞いていたこと、実際には行わなかったもののそのような名誉の倫理的要請を充分に知っていることを意味するだろう。

以上のように、『カストロの尼』の物語の内部では、エレヌとジュールの恋愛は名誉を根拠にした様々な障害に遭い、人物たちは名誉の価値を内面化している。この意味で、『カストロの尼』で具体的に描かれる世界では、本節の最初に参照した小説冒頭における語り手の断言とは異なり、名誉が人物の行動規範として機能する。とはいえ、冒頭で言及されたフランス的な名誉と、エレヌの父やラニュースが求めジュールが表面上は拒否する名誉とはそもそも性格の異なるものである。エレヌの父やラニュースが求める名誉は相互に憎しみを掻き立てるが、その憎しみこそ語り手が言う、16世紀イタリアにおいてフランス的な名誉を「生まれるのを妨げる」原因である。おなじ「名誉 (honneur)」の語を用いながらも、勲章に代表される君主制の名誉はやはり16世紀イタリアにはそぐわないものであり、両家の対立の原因となる名誉はむしろ16世紀イタリアに相応しい「深い憎しみ」と「永遠の不信」、すなわち「深い情熱」に当たる。二種類の名誉は正反対の性格を帯びている³⁰。

²⁹ Stendhal, *Chroniques italiennes*, op. cit., p. 85.

³⁰ このような二種類の名誉の分類は、ミッシェル・クルゼがローマの民衆について語る次のような定式に一致する。「ローマの [民衆の] フォークロアは、ロザリオとナイフ、つまり殺人と信仰という「文化」である。それはある「名誉」に基づいている。文明化され虚栄にまみれた名誉ではなく、習俗の一部であり、集団の命令で

3. 名誉と恋愛、不貞

勲章に代表される名誉ではなく、憎しみや情熱と同義の名誉心についてさらに検討するために、イタリアを舞台とする他の作品を参照し、名誉という現象のもつある一つの型を考察したい。スタンダールは初期の出版作品からイタリア「中世³¹」への関心を絶やすことがないが、不貞に対する罰という形で現れるその時代の名誉心に興味を持ち続けていたようである。本章では、『イタリア絵画史』（1817）や、1832年に発見された「イタリア写本」と呼ばれる古文書をもとに書かれた『ヴィットリア・アッコランポーニ』（1837）と『パリアーノ公爵夫人』（1838）を参照しながら、歴史上の固有名を繰り返し挙げながらある名誉の形に寄せるスタンダールの一貫した関心を読み取りたい。

『ヴィットリア・アッコランポーニ』において、不貞への罰として裏切った妻とその恋人を殺害するという例が言及されるのは、オルシーニ公とヴィットリアの結婚に当たり、オルシーニ公の最初の妻が話題になる箇所である。その妻は密通したため自分の兄弟の同意のもとに夫に殺されたという。その兄弟とは、メディチ家のトスカーナ大公フランチェスコ一世とその弟の枢機卿フェルディナンドであり、この名誉の犠牲者は名を挙げられていないものの、1576年に死亡とされるイザベッラである³²。

彼 [オルシーニ公] は彼女 [最初の妻] が浮気をしたために、妻の兄弟の同意のもと殺した。スペイン人によってイタリアに持ち込まれた名誉の掟とはこの

ある絶対的な誇りとしての原初の名誉である。Michel Crouzet, « Rome ou “ le génie du christianisme ” », préface pour ; Stendhal, *Promenades dans Rome*, Gallimard, « Folio/classique », 1997, p. xxvii.

³¹ 「中世」の範囲は曖昧ではあるが、クルゼは、ゴージェを引用しながら「ギリシャでもローマでもなく、12世紀から16世紀の間にあるあらゆるもの」がロマン派にとっての「中世」であり、スタンダールはそれよりもさらに広い範囲を想定し、17世紀のプロンドの乱を上限にしている、と論じている。Michel Crouzet, « Stendhal et les républiques italiennes du moyen âge », in Michel Arrous, Florence Boussard et Nicolas Boussard (éds.), *Une liberté orageuse : Balzac, Stendhal : moyen âge, renaissance, réforme : actes du colloque international, Tours, 27-28 juin 2003*, Eurédit, 2004, p. 536.

³² 『19世紀ラールス (Le Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle) 』には、「Orsini (Isabelle)」の項目があり、彼女の死の逸話が記載されている。

ようなものであった。女性の恋は正当でない場合、夫とおなじくらい妻の兄弟も侮辱したのだ³³。

この引用は本文につけられた注の形で書かれ同様の記述は本文でも繰り返される。『ヴィットリア・アッコランボーニ』の筋には直接関係ないものの、このような名誉の倫理が同時代の読者にとって馴染みのない過去の習俗であるため、説明が必要とされたのであろう。

同じく「イタリア写本」を源泉にもつ『パリアーノ公爵夫人』は、パリアーノ公爵夫人の浮気とそれゆえの夫人の死が中心事件である。ナポリの名門カラファ家出身の教皇パウルス四世の誕生によって、教皇の甥の三兄弟の振る舞いがローマで横暴を極めるものの、告発にあい、兄弟は権力を奪われる。田舎暮らしを強られる兄のパリアーノ公爵に、妻が浮気をしたという密告が入る。兄の妻の浮気は一族への侮辱であるという弟の枢機卿の進言もあり、「名誉を汚した」と認めた色男が殺害された後、パリアーノ公爵夫人自身も自身の兄の手によって殺される。これら一連の殺人、つまり「不貞の復讐をする殺人、つまり司法がこれまで決して関わらなかった種類の犯罪³⁴」は、通常ならば何の罪にも問われないものであると語り手はいう。

そもそも、彼とその兄 [カラファ枢機卿とパリアーノ公爵、つまりカラファ家の兄弟の二男と長男] は、他の人であれば罪でなかったような罪のために断罪された。たとえば、不実な妻の恋人とその妻自身に死を与えたというような罪で。数年前、オルシーニ公はトスカーナ大公の妹を妻にしたが、不実だとみるとトスカーナ領内にも関わらず毒殺し、それも妻の兄の大公の同意のもとであり、このことでオルシーニ公が罪に問われることは決してなかった。メディチ家の娘の多くはこのように死んだ³⁵。

このような名誉の掟ゆえの殺害は本来は罪に問われないものであり、その実例としてスタンダールがすでに他の作品で言及している逸話が挙げられている。オルシーニ公の最初の妻は、すでにみた通り『ヴィットリア・アッコランボーニ』で言及され、「メディチ家の娘の多く」には次に検討する『イタリア絵画史』で言及されるコジモー世の娘マリアなどが含まれるだろう。

³³ Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. 2, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 1002.

³⁴ Stendhal, *Chroniques italiennes*, *op. cit.*, p. 173.

³⁵ *Ibid.*

『イタリア絵画史』を参照すると、このような名誉への関心が 1832 年の写本発見に少なくとも 15 年近く先立つものであることが確認できる。『イタリア絵画史』の「序文」にはフィレンツェの専制君主コジモー一世にまつわる逸話が紹介されている。コジモー一世の美貌の誉れの高い娘マリアは、父の小姓マラテスティと愛し合い、逢い引きを目撃される。マリアは毒殺され、マラテスティは 10 年にわたる投獄のち脱獄するものの、暗殺される。父の認めない身分違いの恋愛は発覚すれば色男だけではなく当の娘にも死を招く。一方、マリアの妹は結婚したものの、姉と同じ運命にある、と語られる。「夫が刺殺させたのだ」という短い記述から事情を推察するしかないものの、結婚後に他の男と関係をもち夫に殺されたのだろうか。これら二つの例にあるように、夫あるいは父は、妻や娘の許されざる恋愛に死という罰を与える。マリアの逸話を受けてスタンダールは次のように語る。

この時代の名誉とはこのようなものだった。この残酷な名誉心は共和国の美德にとり替わったものの、その実、虚栄心と勇敢さの卑しい混合物でしかなかった³⁶。

コジモー一世は、自由をもとめていまだに燃え上がる心の持ち主を卑しくするめに必要だった勇氣と繊細さの混合物によって、気を紛らわせた³⁷。

一つ目の引用の「勇氣と虚栄心の卑しい混合物」は二つ目の引用の「勇氣と繊細さの混合物」に対応し、前者の「共和国の美德」は後者の「自由」に対応するだろう。

前節でも確認した通り、イタリアにはそもそも自由の共和国があったものの、もともとその市民の一員であったある一家（フィレンツェのメディチ家が代表例）が篡奪者（*usurpateur*）として専制君主になった。こうして専制君主の恐怖と自由をもとめる民衆との間で緊張、動乱が生じた。失われつつある自由、「嵐のような自由（*liberté orageuse*³⁸）」をめぐる闘いと、さらにフランス、スペイン、ドイツといった外国軍の侵入（カール五世による 1527 年のローマ劫掠と、1530 年のフィレンツェ占領が代表例）が加わった動乱の時代に、様々な芸術家の才能が開花した。上の引用の残酷な名誉心は、専制君主個人への忠誠を家族だけではなく、国家の民衆にも求める。彼らの自由

³⁶ Stendhal, *Histoire de la peinture en Italie*, Gallimard, « Folio/essais », 1996, p. 47. 強調原文。

³⁷ *Ibid.*, p. 48.

³⁸ *Ibid.*, p. 60.

を奪い、恐怖によって支配する。このような自由の喪失が「卑しい」とみなされている。不貞に対する罰も、自由を奪う専制君主の乱用する悪徳の一つとして位置付けられる。16世紀イタリアの名誉心は、不貞への罰という形でここまでみてきたように作家の関心を強く引いているものの、歴史的な起源においては「卑しい」とされている。

その一方で、スペイン由来の残酷で卑しい習慣である名誉心は、次の引用のように、18世紀のフランスやイギリスと対比されることで輝きを見せる。その点で、残酷な名誉心は両義的な位置付けをされていると言える³⁹。

カール五世の時代（1530）以来、ナポリとフィレンツェそれからローマでさえもスペイン風の習慣がいくらか真似されたといわれていることを私は知っている。けれどもこのひどく貴族的な習慣は、人間という名に値する人間が自分の魂の動きに対してもっている限りない敬意に基づいているのではないだろうか？ 排除されるどころか、エネルギーは誇張されていたが、一方で、1760年のリシュリュー公爵を真似ていたうぬぼれ屋が一番大事にした格言は、何事にも動じないように見せる、だった。フランス人のうぬぼれ屋よりも好んで現在ナポリで模倣されているイギリス人のダンディの格言は、どんなものも見下し退屈であるかのように見せかける、ではないだろうか⁴⁰。

「スペイン風の習慣」にはここまで検討してきた不貞への罰といった残酷な名誉心も含まれるだろう。「何事にも動じない」という表現には第一節で検討したスタンダールにおけるスペイン主義とは反対の原理を見ることができ。名誉心は、「エネルギー⁴¹」の発露として讃えられている。

ここまで本節では不貞に対して罰を与えるという16世紀イタリアにおける名誉心を検討してきたが、もっとも、妻の貞節が夫の名誉とされるという通念は19世紀においても共有されていた。フランスでのコキユの苦しみは、『赤と黒』におけるレナール氏の内的独白を通して窺い知れる。突然生じた

³⁹ スペインからイタリアに輸入されたとされる「シジスベ (sigisbée)」の習慣も、「残酷な名誉心」同様、両義的であるように思われる。『パルムの僧院』冒頭でシジスベはナポレオン軍の輝きと対比されながら否定されるが、その一方、結婚に縛られない自由恋愛を社会が許容するという点においては、同時代フランスとの対比を通してイタリアのシジスベは好意的に論じられる（『恋愛論』第49章参照）。実際、『パルムの僧院』においてジーナの周りにはシジスベを思わせる騎士役が登場する。

⁴⁰ Stendhal, *Chroniques italiennes*, op. cit., p. 153-154. 強調原文。

⁴¹ スタンダールにおけるエネルギーの主題については次の論文を参照。Michel Crouzet, « Stendhal et l'énergie », *Romantisme*, n° 46, 1984, p. 61-78. また、次の研究書でも触れられている。Michel Delon, *L'idée d'énergie au tournant des Lumières (1770-1820)*, PUF, 1988.

妻と家庭教師の姦通の可能性を前にレナール氏は様々な解決策を思いめぐらし混乱する。不貞の疑惑を放置することで間男に対する「笑い (ridicule)」の的となることを恐れたレナール氏は、二人の殺害を検討するものの決断できない。

このこせがれが妻と一緒にいるところを取り押さえて、二人同時に殺してしまうことだってできる。そうすれば、事件の悲惨さのおかげできっと笑いは避けられるだろう。この考えは受け入れやすかった。さらに細かい点にまでこの考えが掘り下げられた。刑法はわたしの味方だ。それに何が起きようとも、陪審団の中の仲間と修道会はわたしを助けてくれるだろう。レナール氏は刃先の鋭利な狩猟用ナイフを確認した。けれども、血を見るという考えに怖くなった⁴²。

周囲の人間の視線を顧慮し笑われることを恐れる論理、復讐の行動を考えながらも実行を躊躇する怯懦、これらはイタリア 16 世紀に見られた自分の魂の動きへの限りない敬意とは相いれない。

貴族の生まれを常々誇るレナール氏がこのように行動を起こさない一方、材木屋の生まれのジュリアンは名誉や勇気を自分に言い聞かせ、しばしば大胆な行動をとる。第二部において、夜中に部屋へ忍んで来るようマチルドから手紙をもらったジュリアンは、躊躇した後、名誉の語を持ち出す。

否定しても意味がないさ。と彼はついにいった。彼女の目にはぼくは臆病者に映るだろう。上流階級で一番輝いている人、こんな風にレ公爵の舞踏会で言われていたのだが、そんな人を失うだけではない。公爵の父親をもち自分もいずれは公爵になるクロワズノワ侯爵がぼくのために捨てられるなんていう素晴らしい喜びも失ってしまうのだ。当意即妙の機知、家柄、財産、ぼくにはない長所をみな備えている魅力的な青年だというのに…

この後悔は一生ぼくについて回るだろう。彼女のためじゃない、恋人などいくらでもいるのだから！

…けれども名誉は一つしかない！

とドン・ディエーグは言っている。今、明らかにはっきりと、ぼくは自分が向き合う最初の危険を前にしり込みをしている⁴³。

ジュリアンにとって危険を犯す価値はマチルド自身にあるわけではない。大貴族の青年に自分が優越するというところにこそ意味がある。他のあらゆる点でかなわない相手への優越が、いま行動することで名誉を価値を体現でき

⁴² Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. 1, *op. cit.*, p. 461.

⁴³ *Ibid.*, p. 649.

るかどうかという一点に賭けられている。とはいえ、こうして『ル・シッド』を引きながら到達した高揚は、すぐに自分自身によって相対化される。名誉(honneur)が「ガスコーニュ訛り」の«honur»と表記されるのだ。この相対化にジュリアンと名誉との間に本来ある距離を読み取ることができる。本来自分にはそぐわない名誉を内面化したジュリアンは、その価値を躊躇せず実現する勇氣に欠けていることに充分意識的である。それは、第一節で検討した若きスタンダールが夢想と現実の懸隔に対して抱いたスペイン主義の苦しみとこだましあうかのようだ。

レナール氏の多弁と不決断、ジュリアンにおける名誉の価値の内面化と逡巡という『赤と黒』における名誉の現れに対比すると、本節で検討したイタリア 16 世紀を舞台にした諸作品の価値が一層明らかになる。『ヴィットリア・アッコランポーニ』と『パリアーノ公爵夫人』の例では、たとえ残酷であろうとも名誉の掟は断固として迷うことなく実行された。「イタリア写本」発見の喜びを伝える書簡を参照すれば、それが歴史上の事実であることにスタンダールがいかに喜んだのか窺い知れる。周知のように『赤と黒』のジュリアンのモデルの一つは『ローマ散策』に収録されたラファルグ事件であった。そこでラファルグは「ぞっとさせるようなエネルギー(énergie effrayante)」の現れと位置付けられている。16 世紀イタリア、19 世紀フランスと時空を問わず、作家はエネルギーを伝える事実注目し、創作の糧にしていた。